

京都帝國大學法學科大學

經濟論叢

第五卷 第三號

大正六年九月一日發行

論說

同盟罷工と和解及仲裁制度(一)……………法學士 河田 嗣郎

所得稅ニ於ケル所得ノ意義(二)……………法學博士 神戸 正雄

露西亞主義……………法學士 米田 庄太郎

飛脚ノ變遷(三、完)……………法學士 本庄 榮治郎

時事問題

戰後^{ニ於ケル}軍國主義ト民主々義……………法學博士 戸田 海市

雜錄

あだむ・すみす傳拾遺……………法學博士 河上 肇

獨逸ノ植民的發展ノ起源……………文學士 山本 美越乃

露國ノ定期刊行物ニ就テ(一)……………文學士 高 倉 輝

ゆこ・すらう民族運動(二、完)……………文學士 米田 庄太郎

經濟漫錄(三)……………文學士 瀧 本 誠一

しゅもーらゝノ戰後ノ獨逸觀……………法學士 櫛田 民藏

米國ニ於ケル婦人ノ職業……………法學博士 河上 肇

臺灣^{ニ於ケル}死亡率及疾病統計……………文學博士 内田 銀藏

飛脚ノ變遷 (二、完)

本庄榮治郎

序言

第一、幕府繼飛脚

第二、大名飛脚

第三、民間飛脚業

一、町飛脚ノ濫觴

二、地域ノ擴大

三、客體ノ範圍及ビ制限

四、飛脚便ノ種類日限及ビ運賃

五、速達方法ノ發達

六、仲間規約

七、江戸町飛脚

第四、飛脚業ノ衰滅

結言

前々號所載

正誤

前々號所載五四頁八行目ニ

「一時ハ今ノ二時間半ニ當^{△△△}

ル」云々トアルハ二時間ニ^{○○○}

當ルノ誤植。同六三頁六七

行目「毎月十度ノ並便」云々^{△△}

トアルハ並便ノ誤植

本號所載

第三 民間飛脚業 (承前)

四、飛脚便ノ種類日限及ヒ運賃

當時行ハレタル飛脚便ノ種類ハ場合ニヨリテ名稱ヲ異ニシ又同一名稱ニテモソノ内容ヲ同シクセサルモノアリト雖、之ヲ概括スレハ並便、早便及ヒ仕立便ノ三種ニ分ツコトヲ得ヘシ。並便トハ定日ニ取纏メテ發送シ路次遞送ノ日限最モ遅クルルモノニシテ、早便ハ定日ニ取纏メテ發足スルモ遞送ハ一層速達ヲ期スルモノ也。最後ニ仕立便トハ定日ニ拘ラス即刻飛脚ヲ仕立テテ遞送シソノ日限最モ少キモノライフ也。而シテ並便ハ晝間ノミ來往シ夜ハ必ス宿泊スルニ反シ早便以上ハ晝夜兼行ニテ遞送スルモノトス。¹⁵⁾

〔註〕 晝夜行ニ就テハソノ始メ傳馬朱印又ハ奉行等ノ證明書ヲ有スルニ非レハ夜行スルヲ得サリシカ如シト雖、正徳二年以降士商ノ別ナク急用ハ皆徹夜飛脚ヲ發スルコトヲ許セリ。

以上ノ外差込ト稱スル特別便アリ。コハ仕立便アルトキ其幸便ニ付スルコトライフモノニシテ、例ヘハ低價ノ別仕立便ヲ差立ツル場合ニソノ運賃ノミニテハ經費ヲ償フニ足ラサルカ爲メ、ソノ補充トシテ諸商家ヘ丁稚ヲ走ラセテソノ出狀ヲ促シ別仕立ニ合シテ差立ヲ爲シ、或ハ豫メ他ノ得意ヨリ引受ケタル仕立便ヲ之レト合シテ差立ツルカ如キコレ也。然レトモコレ等數種ノ書狀運賃等ヲ合スルモ尙經費ヲ償フニ足ラサルトキハ、更ニ飛脚仲間相互ニ問合セヲナシ、同一ノ幸便ニ付シ得ヘキモノヲ取リ合セ、仲間相合シテ一ノ仕立便ヲ發スルモノトス。之ヲ持合ト唱ヘ仲間ノ割合ヲ定メテソノ運賃ヲ處分スル也。若シ仲間中ニ持合ナキトキハ損失シテ差立ツルコトモナキニアラストイフ。¹⁶⁾ 享和三年ニ從來ヨリ行ハレシ一本仕立書狀請負ノ方法宜カラス漸次行ハレサル

15) 近世風俗史(守貞漫稿)上卷 99頁

16) 日本橋區史第一冊 541頁

ニ至リシタメ定飛脚規程ヲ改正シテソノ弊ヲ除去セシト努メタルガ、請負ノ方法宜カラサリシトイフ所以ノモノハ畢竟別仕立便トシテ差出スヘキモノヲコノ差込又ハ持合ニ付スルカ如キコト行ハレ、コレカタメ即刻發スヘキ書狀ガ往々遲延シテ發セラレタルコトソノ一因ナリシ也。

因ニ幸便ナル語ハ飛脚發送ノ時限マテニ集リタル信書荷物ヲ取合セテ遞送スルノ謂ニシテ即刻差立ノ仕立便以外ノモノニツイテハ何レモ幸便ト見ルコトヲ得ヘシ。¹⁷⁾是レ並幸便、早幸便差込幸便等ノ語アル所以也。場合ニヨリテハ幸便ナル語ヲ並便ニ對シテ用ヒ早便ヲ意味スルコトモナキニ非ルカ如シト雖、¹⁸⁾コハ寧ロ特殊ノ用法ニシテ一般ニ幸便トイフコトハ以上ノ意義ニ解シテ差支ナキモノトス。

而シテ並便及早便ノ發足回數ハ屢變更増減シ、ソノ初メニ於テハ大阪發足月九回ノコトアリシモノノ翌年ニ於テ月三回トナリ三度飛脚ナル名稱ノ生シタルコトハ既ニ述ヘタル所ノ如シ、而シテコノ三回モ寛文四年(1664)七月ノ定ニヨレハ毎二ノ日ナリシカ延享二年(1745)ヨリハ四ノ日トナリ、安永二年(1783)ニハ増加シテ月十二回トナルニ至レリ。然ルニ又一方ニハ早便ノミニツイテソノ回數ヲ定メタルコトモアルカ如シ。例ヘハ寛保元年(1761)ノ三都飛脚商規約ニヨリ大阪屋茂兵衛ハ毎月二六九ノ九回、早飛脚八軒ノ仲間會所ハ一四八ノ九回發足シ、尙三五七ノ十二回ヲ折半シテコノ兩者ニ分チシカ如キハ定日差立ノ早飛脚即チ早便ニ關スルモノナリ。又寛政十一年(1798)ノ大阪飛脚問屋江戸屋久右衛門ノ請願書ニヨレハ當時大阪飛脚問屋組合ノ發スル早飛脚ハ毎月一二四五七八ノ十八回ナリシトイフカ如キ何レモソノ一例也。

17) 日本橋區史第一冊 540頁

18) 日本商業史 192頁ニ出テタル天保元治年間ノ江戸定飛脚仲間定運賃表ヲ見ヨ

(註) 元祿十一年大阪飛脚商ノ願書ヲ定メテ毎夕發足セシメ、寛延二年ニ京都飛脚商ガ江戸順番仲間ヲ開キ毎日俵馬三匹ナリテ東海道ヲ往復シタリトイフハ信譽荷物ノ速達ヲ期スルタメニ行ハレタルコト明カナリト雖、從來ノ重便及早便ノ發足回数ヲ全廢シテコノ方法ノミニヨリシモノナルカ或ハ重便ハ從來ノママトシ、急ヲ要スルモノニツイテノミコノ手段ニヨリシヤハ、疑問ナキ能ハスト雖恐クハ後者ノ手段ニ屬スルモノナルヘシ。タダ毎日差立ノ早便ト仕立便トノ間ニハ從來ノ如キ甚シキ差異ナキナリテ兩者ノ關係ニ何等カノ變化ヲ生シタルナラント考ヘラルルモノコノ點未ダ明カナラス。

以上ノ發足回数ハスヘテ三郡間ニオケル飛脚業ニツイテイヘルモノニテ他地方ニオケル事情ニツイテハ自ラ異ルモノアルヘシト雖、今コレヲ明カニスルヲ得サルヲ遺憾トス。要スルニ並便ニツイテモ早便ニツイテモ三回ヨリ十二回トナリ、九回ヨリ十五回トナリ、十八回トナリシカ如ク次第ニソノ回数ヲ増加スルニ至リシハ交通需要増加ノ當然ノ現象ナルヘシ。

並便早便仕立便トモノノ遞送ノ日限ニツイテハ亦區々ニシテ一定セス、今江戸大阪間ニオケル日限ニシテ當時ノ飛脚仲間ノ定ムル所ノ二三ヲ示サハ左ノ如シ

イ、町飛脚發達ノ當初ハ定六ト稱シ東海道ヲ早着六日間ニテ通行シタリ。

ロ、元祿十一年(1698)順番仲間組織ノ際ニハ五日限六日限七日限八日限ノ四種アリ、
ハ、延享二年(1749)江戸大阪飛脚商協定ニヨレハ 並便。八日限、九日限。

間飛脚又ハ差込幸便(早便)。五日限、六日限、七日限、八日限、

(大阪市史第一冊六五頁ニヨレハ間飛脚ハ又差込幸便ト稱スルモノト同一ナルカ如シ。而シテ間飛脚即チ茲ニ所謂差込幸便ハ前述セル差込便ト同一ニアラサルコトハコノ間飛脚即チ差込幸便ノ外ニ尙仕立飛脚幸便ナルモノアリ、又ソノ相互ノ賃銀ヨリ見ルモ明カ也(後述賃銀ノ條參照)。サレハコニイフ差込幸便ハソノ實質早便ト異ルナク、又仕立飛脚幸

便ト稱スルモノ即前述セル幾達便ニ該當スルモノトイフベシ)

仕立飛脚(仕立便)。四日半限、五日限、六日限、七日限

ニ、寛延二年(1749)江戸順番仲間ヲ開キタルトキ東海道往復日限ヲ定テ七日トス

ホ、寶曆三年(1753)江戸飛脚商協定ニヨレハ

並便、八日限、十日限

催合幸便(早便)、五日限、六日限、七日限

仕立時廻(仕立便)、四日限、四日半限、五日限、六日限、七日限

へ、寛政十一年(1799)拔早飛脚創始ノ際ニハ並便、七日限、八日限、九日限、拔早飛脚(急ヲ

要スルモノノミヲ抜キテ速達ス)五日限

ト、天保元治年間(1830-1864)江戸定飛脚仲間定ニヨレハ¹⁹⁾

並便、二十五六日ヲ要ス

幸便(早便)、六日限、七日限、八日限、十日限

仕立便、正三日限、正三日半限、正四日限、正四日半限、正五日限、正五日半限、正六日限

催合便、(二五八ノ日大阪ヲ發シ概ネ七日目ニ江戸ニ着ス。六日限幸便ノ有名無實トナリシヨ

リ起レルナリ。)

カクノ如ク遞送ノ日限ヲ一定スト雖必スシモ勵行セラレフ遲滯スルコト少カラサリシカ如シ、

安永二年ノ文書ニヨルモ²⁰⁾

19) 日本商業史 192-3頁

20) 種畑氏前掲日本交通史論 501頁以下

『右御用相勤候日限之儀者古來並飛脚ト申候ハ八日九日限り早飛脚ト申候者五日六日限ト御請負奉申上候。然ル處近年道中筋馬拂底之由ヲ申、宿々ニ於テ臨時ニ逗留仕、段々日限延行罷成十五六日モ相掛リ候様ニ相成候處、當時ニテハ川支モ無之候ニ早飛脚之儀者七日八日並飛脚二十日三十日モ相掛リ申候儀ニ御座候』

トイヒ、寛政十一年ノ大阪飛脚問屋江戸屋久右衛門ノ建議ニハ十四五年來道中疲弊シ宿馬ノ支障多ク五日限六日限ノ飛脚多ク遲滞シ、動モスレハ七日八日ヲ經ルニ至リ、且近來書狀荷物等ノ發セラルルモノ益多ク飛脚仲間モ其得意ヲ爭フタメ利益ノ有無ニ拘ラス其賃銀ヲ低落シ道中馬足ノ凝滞ヲ顧ズ巨多ノ増金ヲ出スヲ以テ常ニ多クノ損失ヲ生シ定法ノ如ク實行スル能ハサル旨ヲ述ヘタリ。即チ交通ノ頻繁ヲ加フルト共ニ道中ニ於ル人馬ノ不足ヲ生シ、且飛脚業者間ニオケル不正競争ノ結果トシテ公定日限内ニ遞送スルヲ得サルニ至リシモノニシテ幕府ハ之ニ對シテ展ソノ遞傳ヲ遲滞セサルヤウ命シタリト雖(例ヘハ延享四年、天保元年、同五年等)一片ノ訓令ノミニテハソノ效果ヲ全フスル能ハサルヤ明カナリ。ココニ於テカ特殊ノ方法手段ニヨリテ信書荷物ノ速達ヲ期セントスルニ至レリ。ソノ方法ニツイテハ次節ニ之ヲ述フ可シ。

尙ココニ附說スヘキコトアリ。飛脚賃銀ノコト是レ也。蓋飛脚便ニ緩急ノ別アリ遞送ノ時日ニ長短アリトセハ、遞送賃銀モ亦自ラ異ラサルヲ得サルヘク、之ヲ一瞥スルコトハ必スシモ無用ノ業ニ非ルヘキヲ以テ也。コノ飛脚賃銀ノコトハ驛遞志稿及同考證等ニ散見スト雖、而モ前述ノ如ク時代ニヨリテ飛脚便ノ種類ヲ同シクセス又遞送セラルヘキ客體モ同一標準ニヨレルモノニアラ

ス、例へハ書狀ノ中ニ就テモ通數ニヨリ或ハ形狀ノ大小ニヨリ賃錢ヲ異ニシ目方ノ基準亦同シカラス、加フルニ志稿等ニ於テハコレ等ノ區別ヲ明カニセス、ソノ記述頗ル漠然タルモノアルヲ以テ、直ニ前後ノ數字ヲ比較シ賃銀ノ高低ヲ知ルコトヲ得ス、タゞ大體ノ傾向ヲ察スルニ止マル。今江戸大阪間ニオケル賃銀ノ中主要ナルモノニツキ一表ヲ作成シ、成ルヘク同種ノ性質ヲ有スルモノヲ同一欄内ニ收メテ比較考察ノ便ニ供セントス。

年號	仕立便	差込便	早便	並便	備考
寛保元	三日半限 金九兩二分 四日限 金八兩二分 五日限 金二兩二分	四日限 金四兩	封狀一通 錢二百文	金百兩 銀十三匁 丁銀一貫目 銀八匁 荷物一貫目 銀八匁	考證二五三頁 三都飛脚仲間定
延享二	四日半限 金十兩 五日限 金五兩二分 六日限 金四兩二分 七日限 金二兩三分 (右狀函三百目マデ)	五日限 金三分 六日限 金二分 七日限 金一分 (右狀函二百目マデ)	五日限 錢四百文 書狀 六日限 錢三百文 七日限 錢二百文 七日限 荷物一貫目 銀九匁五分 封狀一通 銀一匁五分 八日限 兩目方一貫目 銀十四匁 同狀函二通入マデ 銀三匁五分 金百兩 銀二十二匁	書狀一通 錢四十二文	考證二五九頁以下 江戸大阪飛脚商協定 上欄早便中ニ掲クルモノニ對シ考證ニハ差込便ニ對シ仕立飛脚幸便ノ語ヲ用ヒアルモノ、今實質の内容ニヨリ上ノ如ク分類ス
四日限 金三兩二分 銀五匁				小封書狀一通 銀七分	考證二六九頁 江戸飛脚商協定

寶曆三 四日半限 金三兩 銀五匁 五日限 金二兩二分 銀十匁 六日限 金一兩二分 銀十匁 七日限 金三分 銀五匁 (右狀函百目迄?)	五日限 銀七匁五分 六日限 銀六匁五分 七日限 銀五匁五分 (右狀函百目マデ) 八日限 銀廿八匁 十日限 銀七匁五分 (目方一貫目マデ) 金百兩 銀十五匁	上欄早便ノ欄内ニ舉クルモノハ考證ニハ僅合幸便ト稱セリ
文化三 四日限 金四兩二分 五日限 金三兩 (書狀一通ヨリ 掛目三百目マデ)	書狀一通 (掛目十匁迄) 六日限 銀八匁 七日限 銀六匁 八日限 銀四匁 金百兩 銀十一匁 書狀一通 (掛目十匁迄) 銀二匁 古事類苑政治部四、一三五三、一三五七頁定飛脚問屋六軒仲間定	
天保元年 正三日半限 金七兩二分 正四日限 金四兩二分 正四日半限 金四兩 正五日限 金三兩二分 正五日半限 金三兩 乃至 元治元年 正六日限 金二兩二分	書狀一通 六日限 銀二匁 七日限 銀一匁五分 八日限 銀一匁 十日限 銀六匁 金百兩 六日限 銀五匁 七日限 銀四匁五分 八日限 銀三匁五分 十日限 銀二十匁 書狀一封 銀三分	日本商業史一九二四頁江戶定飛脚仲間定則運賃上欄早便中ニ掲グルモノハ商業史ニハ單ニ幸便ナル語ヲ用ヒアリ

正三日限 銀七百匁 (封物百目限)		荷物一貫目 六日限 銀五十匁 七日限 銀四十匁 八日限 銀三十匁 十日限 銀二十五匁 書狀一封(催令便) 正六日限 銀一匁		
慶應末年 明治初年 三日半限 金十五兩 四日半限 金十七兩 五日限 金三兩 六日限 金三兩 (日方三百匁迄)		六日限 銀四匁 八九日限 銀二百匁 (日方二十匁マデ)		日本橋區史第一册 五 四〇頁

右ノ表ニヨリテ之ヲ見ルニ、第一ニ、速達便ノ賃錢ハ他ヨリモ遙カニ高價ニシテ、又遞送日數ヲ減スルニ從ヒテ賃錢ノ高價トナレルコトハモトヨリ當然ノコトトイハサル可ラス。例ヘハ延享二年ノ例ニヨルニ、並便書狀一通ハ四十二文ナルニ之ヲ五日限トスレハ早便ハ四百文、差込便ナラバ金三分ト銀十匁トヲ要シ、更ニ仕立便トスレバ金五兩二分ト銀五匁トヲ要スルカ如キ是レ也。第二ニ運賃カ年代ヲ經ルニ從ヒ如何ニ變更セラレタルカハ前述ノ如ク精密ニ比較論斷スルコトヲ得スト雖、大體ノ傾向トシテハ飛脚運賃ハ低落ヨリモ寧ロ高騰ニ向ヘルモノノ如シ。例ヘハ五日限仕立便ガ寶曆ニ金二兩二分ト銀十匁ナリシモノガ、天保元治ニハ金三兩二分トナリ、七日限荷物一貫目ノ遞送賃ガ銀九匁五分(延享)ヨリ三十五匁(文化)トナリ更ニ四十匁(天保)トナレルカ如キコレ也。慶應末年ニオケル賃錢ノ昂騰ハ當時國內騷擾甚シク往來益繁ク各街道ノ混雜一方ナラザルニヨルモノニシテコハ寧ロ例外ト見ルヘキモノナラン。

第三ニ、右ノ運賃ヲ現時ノ貨幣ニ換算スレハ果シテ幾何ノ金額ニ上ルモノナリヤトイフニ、コレ亦頗ル困難ナル問題ナルガ、今假リニ吉田博士ノ論セラルル所ニ據リ、金一兩ヲ今日ノ二十圓ニ當ルモノトシ、銀四匁ヲ以テ一兩ノ十五分ノ一トシテ大體ノ見當ヲ示サバ天保ノ頃江戸大阪間正四日限ノ仕立便ヲ發スルトキハ約九十圓ヲ要シ、五日半限トスレハ六十圓ヲ要スル勘定也。早便ニヨルトキハ六日限ニテ銀二匁即チ約七十錢ヲ要スル也。當時ノ通信機關ガ既往ニ比スレハ甚タ發達シ居タリシモノナルコトハ明カナリト雖而モ書狀一通ノ遞送ニ尙六日間ヲ費シテ漸ク京阪ヨリ江戸ニ着シ、料金七拾錢ヲ要ストセハ通信機關ハ未ダ一般民衆ガ十分ニ利用シ得ヘキ程度ニマデ發達シ居ラサリシコトヲ知ルヘク、殊ニ仕立便ノ如キハ巨費ヲ要スルカ故ニ諸藩等ノ重大事件ノ外、多ク用ヒラレサリシ事情ヲ察スヘキ也。²¹⁾

五、速達方法ノ發達

元和寛文ノ頃町飛脚ノ行ハレテ以來飛脚遞送ノ方法ハ種々ノ變遷アリタリト雖、ソノ要旨トスル所ハ遞送ノ日限ヲ短縮セントスルノ點ニ在リシモノノ如シ。サレバ既ニ述ヘタル遞送ノ回数ノ増加ノ如キ、或ハ取次所ノ増設ノ如キ或ハ過重荷物ノ禁止ノ如キ何レモ速達ノ一手段トシテ行ハレタルモノナリト見ルコトヲ得ヘシト雖、ココニハ其他ノ方法ニツイテ之ヲ略述セントス。

(一)飛脚問屋ノ順番ヲ立テテ速達ヲ期セシモノ。元祿十一年(1698)大阪町奉行安藤駿河守飛脚總問屋十六人ニ諭シテ毎夕順番ヲ以テ發足セシメ、且ソノ組合ヲ定メテ順番仲間ト稱シ踏次日限ヲ五日六日七日八日ノ四種ニ分チシコトハ當時三度飛脚問屋ノ發着定期ノ如クナラス、時々公用物ノ

21) 日本文明史話 329-330頁

22) 日本文明史話 329頁、日本橋區史第一冊 540頁

遞傳ヲ遲滞セシメタルカ爲メニシテソノ速達ヲ期センカタメナリシコトハ自ラ明カ也。其後寛延二年(1749)ニ京都飛脚商越後屋七郎右衛門等十二人相議シテソノ支廳江戸室町二丁目十七屋孫兵衛ヲ以テ繼立元問屋トナシ江戸順番遞送ヲ開始シ、東海道往復七日トシ毎日傳馬三匹ヲ以テ往復シ、京都吳服所ノ絹布、京都締紳家ニ條城在番諸士及ヒ近國諸國代官發スル所ノ公書諸寺社農商等ノ信書荷物等ヲ遞送セシガ、東海道往復ノ日數ヨリ見ルモ、前述ノ順番仲間ト同シク一般ニ遞送ノ迅速ヲ期スルタメニ行ハレタルモノトイハサル可ラス。

(二) 遞送ノ機關ヲ變革シテ速達ヲ期セシモノ。三度飛脚町飛脚等ニ於テハ、遞送ハ傳馬ノ方法ニヨリ各宿驛ニ於テ人馬ヲ繼キ代ヘテ宛所ニ達スルモノナルガ、正徳五年(1715)ニハ江戸若狹屋ハ東海道歩行飛脚ヲ始メ、降テ元文四年(1739)ニハ大阪柳屋ノ通馬早飛脚行ハルルニ至レリ。歩行飛脚ノ目的ガ遞送ノ迅速ヲ期センカタメナリシヤハ未タ明ナラスト雖、柳屋ノ早飛脚ノ行ハレタル所以ハ當時江源組(江戸屋源右衛門、近江屋嘉平次等ノ組合)ノ遞送怠慢ナルヲ憤リ、路次騎馬ヲ以テ往復シ速達ヲ目的トシテ行ヒシモノ也、然レトモコノ通馬早飛脚ノ方法モ其後ニハ急狀スキヲ擧狀急便(後述)ニ託スルコトトナリ、其他種々ノ改革モ遞送ノ機關ニ大變更ヲ加フルコト少カリシヲ以テ大抵ノ飛脚ハ人馬遞傳ノ方法ニヨリシモノト見テ差支ナカル可シ。

(三) 急ヲ要スルモノニ對シ特殊ノ方法ヲ講シテ速達セシメタルモノ。コノ方法ニ屬スルモノニ馬早飛脚(登早繼飛脚)、擧狀急便スキ、援早飛脚等アリ、今順次之レヲ説明スヘシ。

馬早飛脚ハ寶永(1704)ノ頃ヨリ江戸森山町若狹屋忠右衛門等ノ行フ所ニシテ東海道關、四日

市、桑名、宮、池鯉鮒、吉田、新居、橋輪、金谷、阿倍河畔、興津、吉原、三島、箱根、小田原、藤澤、川崎ノ十七ヶ所ニ繼立所ヲ設ケ江戸大阪間ヲ直達シ、路次川支等ノタメニ停渡ニ遇ヘハ則其駄中ヨリ急用ニ係レル書狀行季ヲ援擢シ、別ニ急脚ニ付シ宰領尾行シテ之ヲ點檢スルノ法ナリシカ、ソノ業次第ニ盛大トナリシタメ、同業島屋佐右衛門等ノタメニ讒訴セテレ、寛保二年(1762)ニ至リテ之ヲ禁セラル。島屋等亦嘗テ窮ニ馬早飛脚ノ方法ニ倣ヒ早飛脚ヲ營ミシカコトニ於テ又コレヲ中止シタリ。

次ハ擢狀急便ハ延享元年(1780)ニ右ノ馬早飛脚ノ方法ニ倣ヒ、改メテ官許ヲ得、駄中ヨリ急便ヲ擢出シ晝夜ノ別ナク、遞夫三人(晝二人)ヲ以テ送ラシムルモノニシテ江戸飛脚商近江屋嘉平治島屋佐右衛門、江戸屋吉郎兵衛等ガ行ヒシ所トス。而シテ之ニ二種アリ。庭拔狀ト道中拔狀ト是レ也。庭拔狀ナルモノハ飛脚屋ノ店頭ニ於テ急ヲ要スルモノヲ抽拔シ、別ニ行李ヲ製シテ之ヲ發シ、道中拔狀ハ道中路次ニ於テ之ヲ抽出スルモノニシテ其宰領豫メ騎馬ヲ以テ途中ニ要シソノ急狀ヲ領スレハ則、馳驅シテ之ヲ送達スルノ方法也。コノ方法ハ甚迅速ナリシモノト見エ、カノ柳屋ノ馬早飛脚モ其急便物ハコノ擢狀便ニ託スルニ至リシトイフ。

江戸飛脚商ノ行ヘル擢狀急便ニ倣ヒテ大阪飛脚問屋江戸屋久右衛門等ニ於テ行ヒシモノヲ拔早飛脚トス。即チ寛政十一年官許ヲ得タルモノニシテ從來大阪飛脚問屋仲間ノ早飛脚ハ每一二四五七八ノ十八回遞送ヲナセルガ、七日八日九日限ノ通常便ハ從前通トシ、早狀早荷物ハ今從悉ク問屋柳屋ニ集メ、從來ノ如ク乗下十八貫目ニ造リ(乗下十八貫目トハ傳馬一匹ニツキ兩脇ニ明荷即チ行李各一個ナリ)着ケソノ重量ナ十八貫目迄トシ宰領ハ自ラ兩荷ノ上ニ跨ルナリ)

大阪諸家大切ノ公用五日程書狀及西國筋諸侯官用狀其他五日程早狀早荷物ハ右宰領飛脚乗下十八貫目荷物中コリ拔擢シテ拔早荷物トナシ目方三貫目ヲ限リ其途中ヨリ歩行荷トナシ、走リ飛脚ヲ以テ送致シ天災停渡ノ外五日程ニテ江戸ニ着セシムルモノ也。

六、仲間規約

町飛脚興リテヨリ次第ニ問屋ノ數ヲ増加シ(註)種々ノ方面ニ於テ發達ヲ遂ケタルガ、又一方ニハ相互間ノ競争激烈トナリ、衝突ヲ生シタルコトナキニアラス。寛保元年京屋彌兵衛等八人相議シテ一ノ仲間規約ヲ作リタルモ、又彼等三都飛脚商ノ間ニ不和ヲ生シタルカ爲メナリシ也。

(註) 三都定飛脚問屋數ノ増減ヲ見ルニ、

	大阪	京都	江戸
寛文四年(1664)	四人	三人	七人
寛延四年(1761)	十二人	十六人	九人
安永二年(1778)	九人	十三人	九人

今ソノ規約ノ要領ヲ摘記スレハ左ノ如シ。

一、早便物ハ毎月二六九ノ九回ハ仲間員大阪屋茂兵衛之ヲ扱ヒ、一四八ノ九回ハ仲間會所之ヲ扱フ。三五七十ノ十二回ハ之ヲ折半シテ兩者各六回トス。而シテ兩者トモ東海道十八ヶ所ニ於テ之ヲ遞傳スル也。尤仕立便ニツイテハ古來ノ如ク定日ニ拘ラス問屋ノ便宜ニ從テ之ヲ發ス。

一、仲間ニオイテ賃銀ヲ協定シ、仲間員ハ擅ニ之ヲ高低スルコトヲ得ス。

一、仲間ノ損益ハ之ヲ八分シ其中六分ヲ五家ニ分チ、残り二分ヲ伏見屋京屋木津屋ノ三家ニ分ツ。

一、右ニ定メタル如キ仲間ノ交互定日差立ニ對シ毎次錢五百文ヲ出シテ懸錢トナシ之ヲ其當行事ニ預クヘシ。仲間ノ交互差立ノ諸入費ハ每度之ヲ其會計中ヨリ除キ置クヘシ。又毎月仲間參會ノ日懸金毎一人金二分ヲ出スヘシ。

即チ同業者ノ早便差立ノ期日ヲ區別シ賃錢ヲ一定シ仲間ノ損益ヲ分配セルカ如キ、ソノ方法ノ進歩セルコト恰モ現代ニオケル企業者聯合ヲ推想セシムルニ足ルモノアリ。

飛脚問屋ニシテ最モ早ク株ヲ許可セラレタルモノハ大阪ニオイテハ京飛脚屋仲間トス。寶曆四年(1754)仲間規約ヲ作り安永元年(1800)七月二十二株ヲ許可セラレ、初年ハ冥加金三十兩翌年ヨリ毎年金十兩ヲ上納セリ。次テ營業地域ヲ擴張シ、京都ノミナラス伏見淀八幡江州諸村ニ書狀荷物ヲ配達スルニ至リ冥加金ヲ増シテ十二兩ト爲セリ。又同地ニオケル江戸三度飛脚屋仲間モ安永三年九月ニ株札十枚ヲ許可セラレ、同年冥加銀十七枚翌年ヨリ毎年銀五枚ヲ納メタリト云フ。²⁴⁾

江戸ニ於テハ天明二年始メテ三都定飛脚問屋京屋彌兵衛外八家ニ對シ定飛脚問屋ノ株式ヲ許可シ、從來掲クル所ノ金飛脚問屋ノ招聘ヲ改メテ京大阪定飛脚問屋トナシ、其行李ニハ定飛脚ノ會符ヲ挿シ、其宰領ハ定飛脚ノ鑑札ヲ所持シ、公私ノ荷物ヲ論セス其行李ノ宿場着順ニ從テ驛馬ノ外、助鄉馬ヲモ繼立使用スルノ特權ヲ與ヘラレタルガ、問屋仲間ハ冥加金トシテ初年金百兩、其後毎年金五十兩ヲ上納セリトイフ。而シテ其營業規程ニハ、荷物ノ貫目ヲ法定量以上ニ重クスル

可ラサルコト、賃銀ハ仲間ニ於テ協定シ妄ニ高低セサルコト、武家其他ノ得意ヨリ若過分ノ大金遞送ヲ依託セラレタルトキハ其住所姓名ヲ糺スニ非レハ之ヲ遞送ス可ラス、又其遞送金銀ヲ急脚ニ託ス可ラサルコト、金銀荷物書狀等其届先ノ査檢ハ五ヶ年以内ニ限ルコト等ヲ定メタリ。而シテ仲間内ノ事務ハ年行事ヲ置キテ之ヲ掌ラシメシコトハ享和三年三月ニ年行事勤仕順番ヲ定メタルニヨリテモ明カ也。

コノ京大阪定飛脚問屋ノ仲間規定ハ其後享和三年ニ改正セラレタルガ、今文化三年十月ニ印行ヲ許サレタル營業規程ニヨレハソノ主要ナル事項左ノ如シ。

一、飛脚賃錢ヲ一定シ飛脚宰領ニ交付スルコト、但京都大阪及東海道路筋ニ向テ遞送スル賃銀ハ皆江戸ニ於テ之ヲ受ケ、又東海道路筋京都大阪ヲ限リ其沿道ノ鄉村ニ入ルモノモ亦ソノ賃銀ハ江戸ニテ之ヲ申受クルコト。

一、京都大阪ノ近郊ニ達スル賃銀ハ皆先拂ニテ申受クルコト。

一、金子入信書ハ表面ニソノ價額ヲ記載スルコト。

一、金銀ソノ他ノ貨物ヲ封入スルモノ皆其鈴印ヲ捺スコト。

一、爲替手形封入ノモノハ定賃銀以外ニ銀一匁ノ増賃ヲ申受クルコト。

一、貴重ノ貨物ニツイテハ其包裝ニ其品名ヲ詳記スルニ非レハ之ヲ遞送セス。然ラサレハ若シ途中ニテ敗損スルコトアルモ辨償ノ責ニ任セス。

一、長尺嵩高ノ物品水濕或ハ塩氣アル物品、脆弱ナル函箱ハ定賃錢外ニ三割ノ増賃錢ヲ申受ク。

一、鼈甲塗物陶器硝子ノ類ハ之ヲ馬便ニ付セサルコト。

一、受託時限ハ戌刻限リトシ、ソノ後ハ次回便ニ廻スコト。

一、遞送物貨ノ宛所ニ達セサルモノヲ査檢スルハ自今三年ヲ限ルコト。

大阪飛脚問屋ノ仲間仕法ニツイテハ文政二年ノ江戸三度飛脚仲間ノ規定アルモ煩ヲ避ケテ之ヲ記
ス。²⁵⁾

以上ノ規程ニヨリテ見レハ信書貨物遞送ノ方法ハ次第ニ精細トナリ、現時ノ郵便ニ於ケルト同
様ノ方法モ存シ、次第ニ秩序整然タルモノアルニ至リシコトヲ知ルヘク、カノ江戸到着ノ飛脚カ
ソノ旅館ノ戸外ニ信書ヲ羅列シテ行人ノ一見ニ供セシカ如キ幼稚ナル方法ハ最早古キ過去ノコト
ニ屬シ、當時ニアリテハ連絡關係アル飛脚問屋ニ送付シテ之レヨリ配達セシメシコトハ前述ノ規
約ヲ見ルモ推知シ得ヘキ所ナリ。今ソノ一例ヲ舉クレハ、大阪ノ江戸屋平右衛門ヨリ發シタル書
狀荷物ハ江戸ノ大阪屋茂兵衛ヨリ配達スルカ如キ是レ也。²⁶⁾

七、江戸町飛脚

以上論シタル町飛脚ト異リテ江戸町内ニ限リテ行ハレタルモノアリ、今之ヲ江戸町飛脚トイフ。
書狀ヲ入レタル箱ヲ擔ヒ風鈴ヲ鳴ラシテ所々ヲ廻リ以テ書狀ノ配達ヲナセシモノ也。増訂武江年
表安政元年冬ノ條ニ²⁷⁾

『コノ頃町飛脚トイフモノ市中へ出テ書簡ヲ届クルヲモテ、ナリハヒトス、淺草ヨリ出テベルカ
始メニテ所々ヨリ出ツ、チイサ成ル箱ヲ脊負、棒ノ先へ風鈴ヲ下ル』

25) 詳細ハ『驛遞志稿考證』344-364頁、大阪市史第二 233-238頁ヲ見ヨ

26) 大阪市史第二 234頁

27) 國書刊行會本 271頁

トイヘリ、然レトモ近世風俗志ニハ²⁸⁾

『町飛脚或ハ町小使ト云テ從來二都トモ有之、蓋定額無之、小民私ニ招牌ヲ出シ本業ノ間ニ兼之コトナリシカ、江戸ニテ嘉永中以來常ニ桂庵ト稱シ奉公人ノ口入ヲ業トスル者芳町ニ五六戸アリ、其一戸及ヒ花川戸、又、芝ト三所ノ者相議シテ行之、夫ヨリ前ハ殊ニ小行ナレバ一事ヲ以テ一往來ス、故ニ雇錢準之、今數事ヲ集メテ一往來ス故ニ賃錢下記ニ及ブ。其扮袂簪形ノ張籠ヲ以テ澁墨ニ塗り町飛脚及ヒ所名家號ヲ朱塗ニ書キテ是ヲ脊ニシ棒ノ一端前ノ方ニ一風鈴ヲ垂レテ往來呼スシテ衆人ニ報告ス。是ヲ以テ下ニモ云如クチリンチリンノ町飛脚等ト異名ス。又江戸ハ先年ヨリ今ニ至リ市中辻番人一事一往來ノ使ヲ爲ス者多シ。

覺

御府内 四里四方 町飛脚定直段

一、同 日本橋ヨリ芝大門迄

上ケ置 代二十四文

一、同 淺草芝居町迄

一、同 芝大門ヨリ品川迄

上ケ置 代三十二文

一、同 山谷ヨリ千住迄

一、同 かうじ町ヨリ新宿迄

一、同 本郷ヨリ板橋迄

返事取 代五十文

一、同 淺草田町ヨリ吉原迄

御屋鋪様方

近所 代五十文

遠所 代百文

一諸國代參仕立飛脚

近國 一里ニ付 代百文之割

遠國 同

代百二十四文之割

右之通り直段ニ而御用向ノ節ハよし町チリンノ町飛脚立花屋マテ御遣シ可被下候以上。
但シ高金之品ハ御斷申上候』

トアリテ武江年表ニ記ス所ト稍異リ芳町ヲ元トシ、淺草芝三ヶ所ノモノ合議シテ始メタリトイヒ、
ソノ年代モ又嘉永以來ノコトナルカ如ク説ケリ。ソハ兎モアレ角モアレ當時江戸町中ノ通信機關
トシテ江戸町飛脚ナルモノノ存シタルコトハ之ヲ知ルヲ得ヘシ。尙右ニ掲ケタル如ク當時ノ運賃
ハ所ノ遠近ニヨリ異レルモノニシテ均一制ニ非ス。而シテ二十文ハ約十錢、百文ハ約五十錢ト見
テ不可ナカルベシトセハ、現時ノ郵便制度トハ同日ノ談ニアラサルコトヲ知ルベシ。サレハコノ
町飛脚ハ、ソノ當時ニ於テコソ、便利ナルモノナリシナランモ、コレヨリ一層確實迅速ニシテ便
利且低廉ナル郵便制度ノ起ルニ及ンテ自ラ絶エタリトイフハ左モアルヘキコト也。³⁰⁾

第四 飛脚業ノ衰滅

飛脚業ノ衰滅ハ即チ現行郵便事業ノ發達ニ在リ。サレハ今姑ク維新以後ニ亘リテ當時ノ事情ヲ
略述シ以テ飛脚ノ變遷ニ一ノ結末ヲ與ヘサル可ラス。

明治維新ノ新時代ニ入りテモ飛脚業ハ卒然トシテ消亡シタルモノニハアラス。内國事務局（後ニ

(29) 日本文明史話 330頁

(30) 日本社會辭彙・下・1638頁

民部省)中ニハ驛遞ノ職アリト雖、驛傳ノコト姑ク舊ニ依リ、政府ハ或ハ各地飛脚賃錢ヲ定メ(元年七月)或ハ定飛脚問屋ノ請願ヲ容レテ東海道東行ノ定便ヲ毎月二五八ノ日、西行ヲ二六九ノ日、上下合シテ十八度トシ每回本馬四匹行李七十二駄ト定メ、急便ニ就テハ東行ハ毎月二五八ノ日、西行ハ、三四六九ノ日上下合セテ二十一度、每回本馬一匹本賃錢ノ十倍増トシ、且特別仕立飛脚ノ賃錢ヲ定メ(元年八月)又東京京都間ニ公書遞傳ノ定便ヲ開キ毎月五、十ノ日(後二四、九ノ日)ヲ以テ之ヲ發シ道中六日(後二十日)ヲ以テ着セシム(元年十二月乃至三年三月)又京都大阪往復急公用狀モ三都定飛脚ニ託スルコトヲ廢シテ別ニ賃錢ヲ定メテ之ヲ遞送シタリ(三年六月)。然レトモ又一方ニ於テ東京飛脚問屋泉屋甚兵衛等奥州筋ニ二七六四ノ十二回ノ定便ヲ開キ(三年九月)從來繼飛脚ト町飛脚ト存シタルカ如ク當時ニ於テモ尙私人營業ノ飛脚ト政府ノ行フ所ノモノトノ兩者相存スルノ狀ヲ呈シタリ。新式郵便カ行ハルルニ至リシハ明治四年三月以降ノコトニシテ前年十二月ニハ既ニ東海道各驛及伏見ヨリ守口ニ至ル各驛ヲシテ何レモ書狀集函及郵便切手賣捌所ヲ設ケシメ、東京京都間三十六時(今ノ七十時間)大阪マテ三十九時(七十八時間)ニテ送達シ東京ハ四日市、京都ハ姉小路車屋町、大阪ハ中ノ島ニ郵便役所ヲ設ケ、又郵便切手ヲ發行シ、漸次橫濱函館新潟長崎神戸等各地ニ及ホシ五年七月以降北海道後志、膽振兩國以北ヲ除キ内國一般本支兩道ノ別ナク、府縣廳ノ所在地及港津市驛等ニシテ公私³¹⁾事務繁多ナル地ニハ皆其信書ノ遞送ヲナサシメ、六年(1871)四月ヨリ量目均一制ヲ實施シ五月一日以來信書遞送ノコト皆驛遞頭ノ獨リ任スル所トナリ、飛脚業ハ全ク禁止セラレ、郵便官業ノ制度始メテ確定シタリ。

(31) Rowland Hill 氏ノ penny postage 制度實施 (1840) ニ後ルルコト三十三年

三百年來通信事業ヲ殆ト獨占セシ飛脚營業ハ政府郵便ノ開始ニヨリテ減落スルニ至リシモノナルガ、而モソノ初メニ於テハ役人ノ事業タル郵便カ果シテヨクソノ成績ヲ擧クヘキヤ否ヲ疑ヒ、飛脚業者ハ官設郵便ニ向テ競争ノ態度ニ出テ三都ノ定飛脚問屋聯合シテ東京大阪間ノ飛脚賃ヲスヘテ郵便同様ノ程度ニ引下ケ又東京橫濱間ハ特ニ賃錢ヲ半減シ其勢侮ル可ラサルモノアリシカタメ驛遞司モ京濱間ノ賃錢ヲ同額ニ引下ケテ之ニ應スルノ餘儀ナキニ至リシコトアリ。然レトモソノ後郵便ハ次第ニ擴張セラレ、主要都市街道ノミナラス沿道各地ニ普及セントスルニ及ヒ彼等ハアラユル方法ヲ盡シテ郵便廢止ノ運動ニ出テ世人亦彼等ニ同情シ通信事業ノ官有ヲ非トスルモノアリ、郵便事業ノ危殆ニ瀕セントセシコト一再ナラサリシトイフ。

明治郵便ノ始祖ニシテ我國通信界ノ偉人タル前島男爵ノ苦慮ハ此際ニ於テ最モ甚シク遂ニ東京飛脚屋總代タル泉屋甚兵衛ノ手代佐々木莊助ヲ召シテ通信事業カ國家ノ大事業ニシテ一私人團體ノ左右スヘキ性質ノモノニアラサルヲ説キ、且飛脚業善後策トシテ彼等同業ヲ團結セシメ、郵便附帶ノ業務ニ從事セシメ以テ彼等ニ新ナル生業ヲ得セシムルト同時ニ彼等ヲ利用シテ郵便發達ノ途ニ供セントノ策ヲ立テタリ。コノ前島男ノ考案ト佐々木氏ノ同業指導トニヨリテ飛脚業者ノ郵便事業ニ對スル競争モ次第ニ衰ヘ、陸運元會社設立セラレテ^(五年)公私貨物ノ運送ニ從事シ今ヤ却テ郵便ノ業務ヲ補フコトトナリ、我國郵便ノ基礎ハコニ漸ク定マルニ至リシ也。³²⁾

結 言

以上論スル所ヲ要スルニ徳川時代ニオケル飛脚制度ハ先ツ幕府ノ公文書ノ取扱ニツイテ行ハレ諸藩又コレニ倣フニ至リシモノナルガ、而モコレノミニテハ官府ノ用ヲ充スニ過キス、町飛脚ノ起ルニ及ンテ漸ク四民通信ノ便ニ浴スルニ至リ、之レカ普及ニ努メ、其速達ヲ期スル所アリシモ私人ノ營業トシテハ未タ十分ニ之ヲ實現スルコトヲ得ス、飛脚業ハ依然一個ノ營業トシテ公益機關タルノ觀念ヲ有セス、幕府亦之ニ便宜ヲ與ヘ畫策スル所ナキニ非リシモ、進ンテ之ニ十分ナル保護ヲ與ヘ助長スルニハ及ハサリシ也。當時路次安全ノ期スル可ラサルモノアリシコトハ所謂雲助胡麻ノ灰ノ橫行ニヨリテ之ヲ知ルヘク、更ニ明和四年飛脚問屋島屋三右衛門カ其部下飛脚ノ途上賊及ニ斃ルルモノ二十三人及盜賊四人ノ冥福ヲ洛東一心院ニ修シ金五百二十五兩錢百三十八貫文米二十五石ヲ以テ其遺族及部下遞夫等ニ給シタルノ事實ニ徴シテ之ヲ見ルヘシ。事情カクノ如クナルヲ以テ當時ノ飛脚ニハ遞送ノ確實信書ノ秘密ノ如キハモトヨリ問然スル所多ク、必スシモノノ當初飛脚カ到達先旅亭ノ戸前ニ於テ多數ノ信書荷物ヲ曝ラシテ行人ノ縱覽ニ供シ名宛人ト稱スルモノノ持去ルニ委セシガ如キ極端ナル事例ヲ引用スルヲ要セサル也。彼等ノ協定セル仲間營業規程ヲ見レハソノ取扱方法ノ今日ノ郵便ト相類スルモノアリ、從テソノ發達ノ程度モ亦推察シ得ヘキモノアルカ如シト雖、而モ私人ノ營業ナルカ故ニ賃銀ハ決シテ低廉ナリトイフコトヲ得ス、地域ノ擴張送達ノ迅速ノ如キ亦コノ營業上ノ打算ヨリシテ十分ニ行ハルルコト難ク、却テ問屋獨占ノ結果トシテ種々ノ弊害ヲ生シ、一本仕立書狀ノ遞送ヲ請負ヒナカラ之ヲ差込³³⁾辛便ニ託シ自然其差立ヲ遲延シ、或ハ法外ノ賃錢ヲ食リ遞送先ニ於テ更ニ酒代ヲ強制セシカ如キソノ一例ニ

過キサル也。コレ等ノ惡弊ヲ除ギ、機關ノ完備統一ト普及、遞送ノ確實安全ト迅速、賃錢ノ低廉、政治上軍事上ノ機密嚴守等ヲ期センカタメニハ、須ク純營利觀念ヲ離レテ公益思想ノ下ニ經營セラレサル可ラス。サレハ通信機關ノ如キハ之ヲ區々タル商賈ノ手ニ委ヌヘキニアラス、國家自ラ之ヲ經營シ政府ノ力ニヨリテ之ヲ遂行スル處ナカル可ラス、明治四年四月新式郵便法開始ノ布告ニ曰ク、

『今飛脚便法ヲ設ケ公私通信ヲシテ自在ナラシムルモノハ世上交際ニ於テ最要ノ事項ナリ、然ルニ舊來之レヲ商家ニ委スルヲ以テ頻ニ其遞送ヲ遲滯シ、僅ニ數十里ノ地ト雖モ動モスレハ十數日ヲ要シ、或ハ終ニ其信書ヲ亡失スルモノアリ、且其急便ハ賃錢甚高價ニシテ容易ニ之ヲ發シ難ク、貧者ハ常ニ彼此ノ情狀ヲ通スル能ハス、依テ遍ク諸道飛脚ノ便法ヲ設ケ、遠近ノ人情ヲ通暢シ、四方ノ狀況ヲ開達シ、上下、急便往復ヲシテ自由ナラシムルノ朝旨ニ基キ、先試ニ本年三月以降毎日東京ヨリ京都ニ至ル迄三十六時間、大阪迄三十九時間ノ飛脚ヲ發シ東海道各驛四五里四方ノ各村及勢州美濃路等モ亦幸便ヲ以テ之ヲ達スベシ』云々

我國ガ飛脚業及私人ノ通信事務ニ從事スルコトヲ禁シテ之ヲ政府ノ手ニ收メタルハ啻ニ通信政策確立ノ基礎ヲ造リタルノミナラス、之ヲ大ニシテハ我國ノ文化的經濟的發展ニ一新時期ヲ劃セルモノトイフ可キ也。